

日本語とアイヌ語の史的関係

中川 裕

千葉大学

キーワード：アイヌ語、日本語、ニヅフ語、同系関係、借用、言語接触、言語類型論

1. 日本語とアイヌ語の系統関係に関する私見

日本語とアイヌ語の史的な関係を考える際に、これまでとりざたされてきたのは、おもに系統と借用の観点からである。日本語とアイヌ語が同系である可能性については、これまでも様々な人が論じてきているが、今のところ筆者はそれらに検討を加えるつもりがない。

比較言語学的な意味での同系性というのは、ウィリアム・ジョーンズ卿の故事を持ち出すまでもなく、まず最初に「似ている」という直感から出発する。その「似ている」という直感が、偶然によるものでも借用によるものでもないことを証明する方法として編み出されたのが、比較言語学を支える「音韻対応」という概念である。すなわち、比較言語学は、相互の関連の不明なデータの集積から何かを発見する手法として発展してきたわけではない。

したがって、その出発点にあるところの「似ている」という直感が働くかどうかというところが、そもそも系統関係を認めるかどうかの分かれ目なのである。比較言語学という学問は、たとえば、いくつの単語に関して音韻対応（のようなもの）を認めれば同系とみなすかというような問いに対する答えを、もともと用意していない。したがって、それが「証明」されたのか否かを第三者が客観的に判定する手段はないと言ってよく、結局はその直感を共有できるかどうか、いわば信念あるいは信仰の争いになってくる。日本語と他の言語の系統関係（アルタイ諸語とか、タミル語とか、オーストロネシア語族とか）に関するこれまでの論争が、みな最終的に宗教論争の様を呈してくるのは、比較言語学という学問の構造上不可避のことなのではあるまいか。

私はもう四半世紀以上アイヌ語の研究に携わっており、同時に日本語のネイティブスピーカーとしての経歴も半世紀近くに及ぶ。その上で、私には日本語とアイヌ語に対して「似ている」という直感がさっぱり働かない。したがって、両者の系統関係を論じるということが、その段階で不可能なのである。というわけで、日本語とアイヌ語の同系関係については、現在のところ私には関心がないということを取りあえず述べておくことにする。

ただし、そういう理由であるから、アイヌ語と日本語との間には全く系統関係がなかったと断言することもできない。Dixon (1997)によれば、言語間の歴史的関係を説明するモデ

ルは比較言語学的な系統論のみではなく、しかも比較言語学的なモデルは比較的近年（言語全体の歴史と比べて）に、一気にその領域を拡大した言語に対して適用できるモデルであって、長期に渡って同系語も含む他言語と安定的な接触を続けてきた言語間には、そのモデルの適用は不能だということである。筆者も、その説に同意したい。仮にアイヌ語と日本語とが比較言語学的な意味で同系の言語だったとしても、もはや筆者には感知できないぐらい遠い昔の話だということである。

2. 日本語とアイヌ語の借用語彙に関する私見

もうひとつ両者の歴史的関係ということでとりあげるべき事項は借用の問題である。これについてもこれまで様々な論議があるが、筆者が思うのは、少なくともおそらく千年以上の間隣り合わせに話されてきた言語にしては、借用語とみなせるものの数が非常に少ないのではないかと、ということである。たとえば、日本語と中国語の関係を考えてみればすぐわかる。現代の日本語は異なり語数において漢語が和語を上回るといわれ（石綿1971:348-49）、日本語話者は漢語起源の語を使わなければ日常会話を行うことも、数を数えることもできない。そればかりか、日本語の音韻が漢語の影響によって大きくその構造を変えられたということはすでに定説になっている。語頭の濁音、撥音、促音、拗音など、すべて古代の日本語には見られなかった要素であり、漢語の影響により発生したと言われている。古代から明治期にいたるまで国民の大多数は文盲であり、漢語を意識的・積極的に学んでいたのは僧侶、貴族、武士などの階級の、おもに男性に限られていたことを思えば、漢語の影響が日本語の構造をここまで変えるにいたったことは驚異的ですからある。つまり、日本が中国の政治的支配下におかれていた歴史などがあつたわけではないにも関わらず、言語接触によって日本語は中国語の圧倒的な影響を受けているのである。

それに比べると、アイヌ語と日本語の間の影響関係は希薄である。話を日本語からアイヌ語への影響に限るとして、アイヌ語が日本語からの影響によって、音韻的に蒙った影響と見られるものは、すでにアイヌ語話者のほとんどが日本語とのバイリンガルになった時代に、それによって生じたと思われるものであり、それでもアイヌ語の音韻体系が全体として変異したというような事態にはならなかった（そうなる前にアイヌ語そのものが日常的に使用されなくなった）。

語彙の面から見ても、*atay*「値」、*cape*「猫：東北方言」、*icari*「ざる」、*icen*「銭」、*makiri*「小刀：東北方言」、*pera*「へら」、*puta*「蓋」、*sake*「酒」、*sippo*「塩」、*sito*「桑」*tampaku*「煙草」、*tokuy*「親友：『得意』との関連」、*tunci*「通詞」、*tumpu*「部屋：『つぼ(ね)』との関連」など、日常語の中に日本語起源と思われる単語が色々あることは事実である。しかし、その総量は、日本語における漢語の占める割合や、英語におけるフランス語起源の語の占める割合に比べて、格段に少ないと思われる。

ただし、信仰・宗教関係に語彙場を限って見た場合、日本語と同源であると思われる語

彙の割合が高いことは古くから知られていることである。たとえば、kamuy「神」、pito「神：『人』との関連」、nusa「幣(棚)」、nomi「祈む(上古)」、onkami「おがむ」、tuki「杯」、takaysara「天目台：『高皿』との関連」、ikupasuy「捧酒筥：『箸』との関連」、otcike「折敷」、等々。これを同系性の証しと見る向きもあるが、特定の文化領域のみに同源と見られる単語が集中するのであれば、それは同系の証拠と考えるよりは文化接触があったと見るのが当然である。仏教の浸透によって、日本語の中に、盂蘭盆、闍伽、菩薩などのサンスクリット起源の語彙が入っていることを、例証として挙げるにもおよぶまい。したがって、特定の領域に同源と思われる語が色濃く存在するという事は、かえって両言語の同系性を否定する証拠になると思われる。

ただ、どちらからどちらへ借用されたものであるのかについては、即断を下してはなるまい。kamuyが日本語の「神」を借用したものであって、その逆ではないことを断言する先験的な理由は何もない。今のところ、「神」>kamuyという方向づけの根拠と思われるものは、日本人のアイヌ人に対する文化的優位性という偏見以外に見出すことはできない。「文化的優位性」などという言語外的な基準を用いる前に、まず言語内的な証拠から両者の借用関係、あるいは各々の語がいつからその言語に存在していたのかを探る作業を行わなければならないはずである。中川(1989)はそのようなことを目指した試みである。

3. 類型論的な関係

言語間の史的関係に関してもうひとつ考えなければならないのは、類型論的な問題である。ふたつの言語が類型論的な似寄りを見せる場合、その解釈はおよそ二種類に分けられるであろう。

ひとつは言語の普遍性に基づく類型論的な似寄りである。たとえば、日本語とアイヌ語はSOVという同じ語順を持つが、周知のようにGreenberg以来の諸研究によって世界の言語の約半数がこの語順であると考えられており、日本語とアイヌ語が歴史的にまったく何の関係を持っていなかったとしても、両者がこの語順である確率は非常に高い。また、両者はその他に、修飾語が被修飾語に先行する、また前置詞でなく後置詞を用いるといった語順に関する共通点を持つが、こうしたいくつかの要素間の順番には関係性があり、SOV言語がこれらの点においても同じ語順をとる確率が高いことも、多くの研究によって立証されている。

もうひとつは、地理的な近接などの接触による類型論的な似寄りである。これは言語連合といった用語で古くからとらえられてきた現象であり、橋本萬太郎氏が「言語類型地理論」の名で分析した現象である。たとえば、SOV、SVO、VSOの主要語順の分布を世界的にみた場合、それは決して地理的にランダムに分布しているわけではないことはすぐにわかる。インドヨーロッパ語を例にとれば、最も東に位置するインド・イラン語派の諸語はSOVの語順を持つが、西へ行くに従ってSVOが主流になり、一番西に位置する

ケルト語派ではVSOとなっている。一方ユーラシア東部を北から南に見ていけば、北のほうにSOVのアルタイ諸語があり、その南にSVOの中国語が、さらにその南にはSVOおよびVSOが主流のオーストロネシア語族やSVOのカンボジア語、ヴェトナム語などを含むオーストロアジア語族が分布している。橋本（1978）は中国語の各方言間における語順の違いが地域的な偏差を持っていることと、その意味するところを、周辺諸民族の語順との連関を示唆しながら明確に示している。

このような語順の地理的な偏りから見ると、日本語がSOVという語順であるのは決して偶然ではなく、大陸から連続しているアルタイ型諸言語の東端に位置しているからだという説明が可能だろう。ただ、日本語のアルタイ諸言語との類型論的な似よりは、いうまでもなくこの語順の点に限られるものではない。これについて論じたものとしては、藤岡勝二（1908）の有名な14カ条の特徴が挙げられるが、さらに服部四郎はこれを受けて、服部（1952:16）において次のようにまとめている。

「藤岡勝二博士始め諸学者によって、アルタイ諸言語・朝鮮語・日本語が次のような構造的類似を共通に持っていることが指摘されている。

- (1) 語頭にrが立たない。
- (2) 母音調和がある。
- (3) 名詞などの格的関係は接尾の附属形式や後置詞で表わされる。
- (4) 動詞（形容詞）の活用は主として附属形式の接尾による。
- (5) 「主語」＋「述語」、「目的語」＋「述語」、「修飾語」＋「被修飾語」などという「語順」が一致している。
- (6) 「関係代名詞」がない。印欧語式の「性」や「数」の範疇がない。

これらの諸特徴が、日本語の他の近隣諸言語には見出されないことが十分明かとなれば、日本語と上の諸言語との間に親族関係の存する蓋然性は大きいとすることができる。しかし、以上述べた所によって明かなように、上述の諸点がいずれも親族関係の決定的証拠とはならないことは、特に注意すべきである」

服部の言うように、これらの諸特徴は親族関係の証拠とはならない。しかし、こうした点での類似性が、前述のような「同系であるという直感」を支えている大きな要因であることは疑いを得ない。日本語—中国語同系論が一顧だにされないのに、日本語—朝鮮語同系論がくり返し問題にされるのは、上記の類似性によるところが大きいであろう。そして、アイヌ語と日本語の同系論がとりざたされるのも、またこうした類型論的な類似性が要因になっていると思われる。

さて、同系性ということが証明されない場合、上記のような特徴の共有は何によるものとして説明され得るか？ ひとつは偶然の一致であり、もうひとつは歴史上のある時期に比較的長期的な交流関係があったこと—すなわち言語接触によるという解釈である。(3)

(4)(5)の語順に関する項目は、前述のように語順の普遍性の問題を考えれば偶然の一致による可能性も排除できない。しかし、前述のように地理的な分布の偏りまで考えるの

であれば、接触によって形成されたものと考えの方が自然であろう。なおかつ(1)の語頭のrの欠如という特徴は、言語の普遍的な性質から求められる現象ではない。従って、偶然の一致による蓋然性はもとより少ない。服部(1948: 42)はこの語頭のrについて「音韻変化の結果失われ得るし、新たに生じ得る」として、モンゴル語族のMonguor語におけるr始まりの語の発生の例を挙げ、「親族関係の決定的証拠とすることができない」と論じているが、親族関係によってそれが説明できない問題であるのなら、なおさら答えは「接触」に求める他なくなるだろう。

そこで、服部の挙げた諸特徴を共有する言語を河野六郎に従って「アルタイ型言語」と称することにし、すべての言語が同時期である必要はないが、それぞれ歴史上のある時期に密接な交流関係を結んでいた時期があったのだという仮説を立ててみることにする。問題は、このアルタイ型言語の中に、これまで言われているアルタイ諸言語・朝鮮語・日本語に加えてアイヌ語も入れることができるのかということである。なぜそれが問題になるのかといえば、前述のようにそれがアイヌ語を日本語や他のアルタイ型言語と同系と見ようとする(例えばPatrie 1982)、直感の根源になっていると考えるからである。以下ではこの点について、アイヌ語と日本語に近接する孤立言語であるニヅフ語と対比しながら論じてみたいと思う。

3. 1. 語頭のrの問題

アルタイ型言語を論じる際に、おそらく極めてidiosyncraticな現象であるために、あまり問題にされてこなかったのがこの語頭のrである。日本語の場合、語頭のrの欠如という特徴を獲得するのは、当然のことながら漢語との接触時期以前に想定される。一方朝鮮語の場合、少なくとも韓国語においては、漢語からの借用語と見なせる語に対してすら語頭のrが認められない。朝鮮語の史的研究においてこれがどのように説明されているのかは、朝鮮語学に疎いため知識を持たないが、おそらく、日本語よりもアルタイ語的な性格が強く働いており、そのために後から入ってきた漢語にまで、アルタイ語的な音韻規則が適用されたということが考えられているのであろう。あるいは、朝鮮語が日本語より古くから漢語の浸透を受け、その後にアルタイ語化が行われたために、漢語もろとも語頭のrを失ったということも考えられるかもしれない。どちらにせよ、朝鮮語の方が日本語より典型的なアルタイ型言語の性格を保持しているということになる。

次に、その構造について一般にはよく知られていないために、こうした議論において常に存在を無視されてきたニヅフ語について見てみることにする。ニヅフ語は先に服部が挙げたアルタイ諸語・日本語・朝鮮語の共通特徴の(2)から(6)までびたりと当てはまる言語であり、日本語をアルタイ型言語とするなら、その中に含めてしかるべきものである。ただしニヅフ語の場合、名詞・動詞ともに /-ku~-gu~-xu~-yu/ (アムール方言)、/-kun~-gun~-xun~-yun/ (東サハリン方言) という接尾辞によって複数であることが示され、

(6) の特徴のうち「数」に関しては非アルタイ語的と言えるかもしれない。しかし、これは日本語の「たち」と同様義務的な形式ではなく、「印欧語式」の数とは機能的に異なる。

そこで(1)の語頭の r についてだが、ニヴフ語には rad' 「飲む」、rajud' 「読む」、rod' 「手伝う」など、語頭に r を持つ固有の語が少なからず存在する。しかし、それはほぼ他動詞に限られ、直前に置かれる目的語の末尾子音に従って t、d-などの破裂音と交替する。また r で始まる名詞は ral 「蛙」(東サハリン方言では ralŋ)、rak 「鯀」などわずかである。これは r に限ったことではなく、ニヴフ語において摩擦音はすべからくこういう様相を呈する (r も摩擦音のひとつとして位置づけられる)。こうした点を含めて、Austerlitz (1982) は、ニヴフ語の s と z を除く総ての摩擦音は、同じ調音点の対応する破裂音から二次的に派生したものであり (r は t に対応するものと考えられている)、祖語の段階においては存在していなかったと論じている。

このアウステルリッツの議論を認めるとするならば、ニヴフ語は r だけでなく他の摩擦音も存在せず、語頭だけでなく語中にも r がなかったということになり、他の言語のケースとはいささか異なるが、一応、かつては(1)の特徴をも備えていたということになろう。

一方アイヌ語は、r で始まる単語を動詞にも名詞にも豊富に持っている。基礎的な単語を中心にいくつか例を挙げてみよう。

名詞

ra 「(草の) 葉、鱗茎」、ram 「心」、rap 「羽」、rar 「眉」、rat 「痰」、rawraw 「エゾテンナンショウ」、re 「名前」、rek 「ひげ」、rekut 「首」、rep 「沖」、rera 「風」、rika 「鯨肉」、rir 「波」、rit 「筋」、ror 「上座」、ru 「道」、rum 「鏃」、rur 「潮、汁」

動詞

ran: rap 「降りる」、ray 「死ぬ」、rek 「鳴く」、ren 「沈む」、resu 「育てる」、ri 「高い」、rimse 「踊る」、rise 「むしる」、rok 「座る(複)」、ronnu 「殺す(複)」、roski 「立つ。立てる(複)」、ru 「溶ける」、ruki 「飲み込む」、rura 「運ぶ」、ruska 「怒る」、ruy 「激しい」

こうした語の語頭音が r 以外の音に遡る可能性は乏しい。たしかにアイヌ語の r は先行する子音によって他の音素に交替することが多く、独立した音素として不安定な点はあるが、だからといって他の音素の異音を起源とするという解釈にまでは至れない。樺太方言では r は「破裂的なそり舌音」などと記述されることもあり(村崎 1979:2)、単なる弾き音ではなく破裂性の高いもので、語によっては t に合流していると見られる場合もある(例: tetarape 「イラクサ製の上衣」; 北海道方言の retar 「白い」pe 「もの」と対応)。しかし、樺太方言においても r は t とは歴史的に別の音素であり、r が破裂音の体系の中から出てきたものと見るのは困難である。

アイヌ祖語の音韻体系を包括的に検討した唯一の研究書と言ってよい Vovin(1993:20-22)も、祖語において語頭の r を立てている。ただし、同書 (36-37) で Vovin は ru 「道」、rap 「羽」など一部の r-について、*tr-という祖形を立てているが、これは探検家などが、おそらく現在の樺太方言の r-と同じような破裂音性の高い r-の、入りわたりの破裂音を t-と聞き取ったと思われる資料をベースに再構された形であり、その資料性からいってアイヌ語に語頭の子音クラスターを認めるのは困難である。

このように、アイヌ語はアルタイ型言語の共通特徴のうち、最も特異的な語頭の r の欠如という特徴を備えていない。

3. 2. 語順と接辞の問題

さて、アルタイ型言語に関して服部 (1952) が述べる諸特徴のうち、(5) の『「主語」+「述語」、『目的語』+「述語」、『修飾語』+「被修飾語」などという『語順』が一致している』という項目に関しては、たしかにアイヌ語も満たしている。しかし(3)の「名詞などの格的関係は接尾の附属形式や後置詞で表される」になると、いささか問題が出てくる。アイヌ語の場合、名詞の格関係は必ずしも後置詞のみで表されるわけではなく、e-、ko-、o-などの「充当相」と呼ばれる動詞接頭辞によっても表されるからである。これらの接頭辞は動詞が斜格補語を動詞内に取り込む際にも機能を果たし、「抱合性」というアイヌ語の文法的な特徴を發揮するのに一役かっている。

repa cikoykip a=cip-e-kusa (N8710302.UP) *

海漁の 獲物 私は=舟-で=を運ぶ

(*この記号は、中川の採録資料の整理番号である)

この充当相の動詞接頭辞を用いた文は、場合によっては相当する後置詞(いわゆる格助詞を含む)を用いて、ほぼ同じ意味の文を作ることができる。

sinki e-ray

疲れ で死んだ (N8806181.FN)

ne humihi ani ray=an

その音 で 死んだ=私は (N8709011.KY)

この両方の手法は同じように用いられるわけではなく、yukar「英雄叙事詩」や inonnoytak「祈詞」などの韻文と日常会話の言語を比べた場合、前者の方に接頭辞を用いた表現が多く使われることが知られている。韻文で用いられる語法がただちに日常会話の語法より古いということとはできないが、アイヌ語の格助詞の多くが動詞起原であり、形態の上で

はほぼ動詞そのままと言ってよいこと、充当相接頭辞の中には「～について」を意味する e-のように、対応する格助詞を持たないものがあること（つまり、e-のついた形式を別の形で言い換えることができないものがあること）、また一般に総合的な表現から分析的な表現に移行する方が、その逆よりも起こりやすいと考えられることなどから、充当相接頭辞を用いた表現の方が、格助詞を用いた表現より古い可能性が高いと思われる。

この充当相接頭辞の存在は、服部の挙げた特徴（4）「動詞（形容詞）の活用は主として附属形式の接尾による」との関連でもまた問題になる。アルタイ型言語は基本的に接尾辞を発達させた言語であり、接尾辞に比べて接頭辞に乏しいというのがひとつの特徴と考えられてきた。ところが、この接尾辞の発達という点もまた、（5）で挙げられている基本的な文の構成要素の語順と独立しているものではなく、強い相関が見られるというのが、近年の類型論的研究の成果である。

Hawkins and Gilligan(1988)によると、VO and/or PrN という語順を持つ言語は、接尾辞、接頭辞のどちらを（または双方を）持つ場合もあり得るが、OV and/or NPo という語順の言語は接尾辞のみを持つ強い傾向を有するという。また、専ら接尾辞のみを用いる言語と、接頭辞のみを用いる言語について見た場合、専ら接頭辞のみを用いる言語は、ほぼ常に VO および PrN であり、また OV and/or NPo という語順の言語には、接頭辞のみを用いる言語というのは見られないという結果になっている。アルタイ型言語は、一般にこの観察によく合致している。

一方アイヌ語について、一ノ瀬（1992:83）は日本語や朝鮮語などと一緒に接尾辞型の言語の中に分類しているが、情報不足による誤認であろう。アイヌ語は接頭辞・接尾辞どちらも用いる言語だが、その両者を比べた場合には、明確に接頭辞の方が発達している言語である。

アイヌ語動詞の接辞による基本的な屈折・派生構造を図示すると以下のようなになる。

動词语幹						
人称接辞	yay- 再帰 si- 再帰 ci- 再帰 u- 相互 i- 不定	e- ko- o- 充当相	語基	数	{-RE} -re~-te~-e {-YAR} -yar~-ar 使役	人称接辞

接尾辞として語基に加えられるのは、数と使役、そして人称接辞の一部のみである。複数表示は語によって補充形 (suppletive) を用いるもの、語末の-p と-n の交替によるもの、まったく交替を起こさないものと様々であるが、基本的には-pa という接尾辞によって複数

表示がなされるとしてよい。使役には動詞の項数を1増やす {-RE} と、変化を与えない {-YAR} のふたつが認められる。語によっては-ke、-kaなどそれ以外の形が用いられるが、それらは機能的には {-RE} と同じであり、個別的な異形態とみなしてよい。人称接辞のうち接尾辞として現れるのは、-an と-as のふたつのみである。このふたつは接辞とは言いながら自立性のかなり高いものであり、clitics としてとらえた方がよいものである。そのために、「人称接辞」という用語の代わりに「人称接語」という用語を用いる研究者もいるが、自立性がほとんど認められず、接合した語と一体化してひとつのアクセント単位をなす人称接頭辞の方までも、同じように「語」という範疇に入れるのは困難である。

一方、接頭辞として加えられるものは、上記のように充当相で3種類、再帰的な意味を持つもので3種類（それぞれ意味的に異なる）、その他「互い」という意味をもたらす u-、不定の対象物を表す i- などがあるが、それらはすべて動詞の項数を変える機能、すなわち付加的な意味を与える機能だけでなく、動詞の文法的カテゴリーを変更する（自→他、他→自のような）機能を持っている。これ以外にも名詞としての実質的な内容を持った he-「頭」、ho-「尻」、e-「～の頭」、o-「～の尻」、程度を表す ru-「やや」、ar-「全く」など、純粋な（名詞、動詞などに起原を持たない）接頭辞は、他にも数えられる。

主格の ku-、ci-、e-、eci-(または es-)、a(n)-、目的格の en-、un-、e-、eci-、i- およびその複合形を問わず、人称接辞の大半が接頭辞として実現することにも注意してよい。アルタイ型で人称が動詞の形態論的カテゴリーとして立てられる言語の場合、主格は必ず接尾辞として実現する。その点からして、主格の人称接辞として接頭辞を発達させているアイヌ語は、アルタイ語的ではないとみなすことができる。

一方、ニヴフ語はこの点でもアイヌ語よりはアルタイ語的である。Gruzdeva(1998:29)に従えば、ニヴフ語の接頭辞は“object, reflexive, and reciprocal markers”の3種のみであり、大多数の動詞接辞は語根の後ろに“-transitive-negative-tense/aspectual-causative-modal-evidential-mood-number”のように、接尾辞として連なる。アイヌ語の充当相にあたるような、前部要素を動詞内に取り込む働きをする接頭辞は存在しない。目的格の人称接辞にしても、もともと接辞だったのではなく、人称代名詞が縮約されて接辞化したものと見てよい。それに対してアイヌ語の場合は、明らかに人称代名詞の方が人称接辞+自動詞+名詞化辞という組み合わせによって形成されたものである。

Hawkins and Gilligan が論じているように、OV and/or NPo という文法要素の基本的語順と接尾辞の間に強い相関があるとすると、このようにアイヌ語はあまり OV 言語らしくない言語だということが言える。その矛盾の解釈としては、アイヌ語はもともと OV 言語でありかつ接尾辞言語だったが、何らかの要因で接頭辞を発達させたと考えるか、アイヌ語はもともと VO 言語であり、そのために接頭辞も発達させていたのだが、何らかの要因でその語順が OV に変わったと考えるかということになる。

文法的な文の構成要素の順番と、形態論的な語の構成要素の順番のどちらがより変化を起しやすいかということを考えれば、VO 言語から OV 言語に変わったという可能性の方

がより蓋然性が高いということに異論はあるまい。また、その解釈の方が「何らかの要因」というのが何であったかの説明がしやすい。もちろんそれは、アルタイ型言語との接触である。

すなわち、歴史上のある時点で、周辺をウイルト語などのトゥングース諸語、ニヅフ語、そして日本語といったアルタイ型諸言語にとり囲まれたアイヌ語は、それらの言語の話者と交易などの関係を結ぶことによって、語順をアルタイ語化させていった。しかし、それは語の内部構造や音韻体系の変化にまで及ぶことはなかった。というのが、これらの現象から導きだされる推論である。

アイヌ語の語順がかつてVOであったという推論の傍証になるかどうか、今のところ確たることは言えないが、町田（2002:214）は、「英語や中国語のような、主語や目的語を表すための『が』や『を』のような単語がない言語では、動詞が主語と目的語の間に来る順番が選ばれているのが普通」だとしている。これはまだ厳密な調査結果ではなく、町田氏の現在までの観察による仮説だそうだが、実際にこのような強い傾向があるとなれば、アイヌ語も名詞句においては主語のマーカ―も目的語のマーカ―も存在しない言語であり、かつてSVOだった可能性を裏付けることになるかもしれない。

この点においても、ニヅフ語はアイヌ語と異なる。ニヅフ語も名詞句自体には主格・目的格を表示するマーカ―が見つからないが、名詞句の末尾子音に応じて他動詞の語頭子音が摩擦音から破裂音化することによって、それが目的語であるということを表示するという、語頭子音交替の現象を有することで有名である。これは積極的な格表示のマーカ―であるばかりでなく、この本質的な性格上、OV言語でなければ発達させ得ない現象である。

以上をまとめると、アイヌ語は日本語との系統的な関係を認めがたい言語であり、かつては類型論的にもそれほど共通性の高い言語ではなかった。日本語との共通点で常に持ち出される語順の点でも、かつては異なっていた可能性が考えられる。歴史的に遡れば、類型論的にはむしろニヅフ語の方が日本語に近い言語であった。日本語と接触したのはおそらく歴史的にそう古い昔のことではなく、その（あるいは、それに加えて他のアルタイ型言語との）接触によってアイヌ語側に起こった変化は基本的語順のOV言語化だけであり、また、音韻変化を起こすほどでもない量の借用語を受け入れた程度である。

これが筆者のアイヌ語と日本語の史的関係に関する帰結である。

参照文献

- Austerlitz, Robert (1982) Gilyak internal reconstruction, I: Seven etyma. *Folia Slavica* 5
- Dixon, R.M.W. (1997) *The rise and fall of languages*. Cambridge :Cambridge Univ. Press
- 藤岡勝二 (1908) 「日本語の地位」『国学院雑誌』14
- Gruzdeva, Ekaterina (1998) *Nivkh*. LANGUAGES OF THE WORLD/Materials 111. München: LINCOM EUROPA
- 橋本萬太郎 (1978) 『言語類型地理論』東京：弘文堂
- 服部四郎 (1948) 「日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係」『民族学研究』13
ノ2. 服部四郎 (1959) 所収. 引用頁数は服部 1959 による
- (1952) 「日本語の系統(1)」日本人類学会編『日本民族』岩波書店. 服部四郎(1959)
所収. 引用頁数は服部 1959 による
- (1959) 『日本語の系統』東京：岩波書店
- Hawkins, J.A. and G. Gilligan (1988) Prefixing and suffixing universals in relation to basic word order. *Lingua* 74
- 一ノ瀬恵 (1992) 「環太平洋諸言語の形態法のタイポロジー」『月刊 言語』Vol.21, No.8
- 石綿敏雄 (1971) 「現代の語彙」『講座国語史3 語彙史』東京：大修館書店
- 町田健 (2002) 『まちがいだらけの日本語文法』東京：講談社現代新書
- 村崎恭子 (1979) 『カラフトアイヌ語一文法編』東京：国書刊行会
- 中川裕 (1989) 「日本語とアイヌ語の相似語彙」『邪馬台国』38
- Patrie, James (1982) *The genetic relationship of the Ainu language*. Honolulu: Univ. of Hawaii Press
- Vovin, Alexander (1993) *A reconstruction of proto-Ainu*. Leiden: E.J.BRILL

On the Historical Relationships
between the Ainu and the Japanese Languages

NAKAGAWA Hiroshi

Chiba University

Keywords: Ainu, Japanese, Nivkh, Genetic Relation, Loan Words, Language Contact,
Linguistic typology

The genetic relation between Ainu and Japanese seems to be improbable and in the old time Ainu had little typological feature common with Japanese. The contact of Ainu with Japanese (or with other Altaic-type languages) happened in relatively recent time and the effect seems to be only the change of basic word order from VO to OV and relatively little amount of loan words.